

高大および地域連携による「総合的な学習の時間」

—フリーサブジェクト「えひめ学」の試み—

岡 部 美 香

(京都教育大学)

A Case Study on Free Subject “EHIME STUDY” —a program of “Integrated Learning” with cooperation among high school, university and local life-long educational facilities

Mika OKABE

(Kyoto University of Education)

Summary

This paper seeks to account for the contents and results of an “Integrated Learning” program in a high school. The program is mainly characterized by the following 3 points: 1. It lasted relatively long, for about one year; 2. In the program, high school, university and local life-long educational facilities cooperated organically and essentially; 3. The high school students had the opportunity to act as socially responsible individuals. In these aspects, this program could help motivate high school students intellectually and encourage them to learn with zeal in high school and go on for further schooling in institutions of higher education.

はじめに

近年、大学教育の接続と連携への関心が高まっている。これは、2004年6月に開催された大学教育学会第26回大会の総合テーマが「大学教育の接続と連携—いつでも、どこでも、誰でも学べる—」¹⁾であったことにも表れているといえよう。

なかでも具体的な取り組みが増加しつつあるのは、「高大連携」である。この取り組みの目的は、高校と大学の間で、制度のみならず、「教育内容やカリキュラムの一貫性ないし系統性」を構築し、それによって生徒・学生を知的に動機づけたり彼らの学習意欲や進路意識を高めたりすることにあるが、杉谷によれば、近年の高大連携の動向はその目的に十分に対応したものにはなっていない²⁾。

そこで本稿では、教育内容などを工夫した結果、生徒を知的に動機づけたり、その学習意欲や進路意識を高めたりするのに貢献できた高大連携の試みの1つを報告する。ここで取り上げるのは、愛媛大学農学部附属農業高等学校（以下、附属農高という）で2003年度に行われた「総合的な学習の時間」の1つ「えひめ学」という授業である。この授業は、附属農校と大学（愛媛大学教育学部）および地域の社会教育機関（愛媛県歴史文化博物館・湯築城）やNPO法人（GCM 庚申庵倶楽部）の連携によって実施された³⁾。以下では、この授業の概要およびその成果と課題について、授業担当者による授業計画書や授業記録⁴⁾、そして関係者に対するインタビューの逐語録をもとに報告していきたい⁵⁾。

1. 「えひめ学」構想の背景

まず、「えひめ」学の構想に至った背景について簡単に説明しておきたい。

1991年4月の中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」のなかで高等学校教育における制度・内容などの改革が推奨され⁶⁾、1999年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の

改善について」では、生涯学習社会に対応できる「課題探求能力」をもった人間を輩出するために各学校種が連携を図り「総合的な学習の時間」などの機会を活かして「学び方やものの考え方、問題解決能力」を育成することの必要性が指摘された⁷⁾。

こうした動向のなかで、附属農高では1995年度から「総合学科」を新しく立ち上げた。この学科では、普通高校と農業高校の長所を受け継ぎながら、それぞれの弱点や束縛をできる限り取り払うこと、すなわち普通高校における職業教育の推進と職業高校における学習内容の充実とを図ることを目的としたカリキュラム作りがなされている。具体的に述べるならば、単位制、2学期制を導入して、生徒が自分の興味・関心や進路希望に合わせて科目を自由に選択できるようシステムを整えている。この学科における「総合的な学習の時間」を附属農高では「フリースubジェクト」と命名し、生涯学習社会を見通して大学との連携・接続を視野に入れながら、フリースubジェクトの授業研究開発を試みた。この試みの1つが「えひめ学」である⁸⁾。

2. 「えひめ学」の授業計画と特徴

フリースubジェクト「えひめ学」の授業計画は表1の通りである。この授業は、「地域の暮らしについて学ぶなかで自分の暮らしや生き方を見つめ直す」ことを全体の目的としており、この目的に賛同する大学教員や地域の人々がオムニバス形式で各回の授業実践を担当した。受講生は、2年生10名であった。

表1 授業計画

回	授 業 の 主 題	担 当 責 任 者
1	ガイダンス	高校教員（家庭科）・大学教員（国語教育）
2・3	松山城の歴史	教育学部生
4・5	愛媛の衣生活	元大学教員（家庭科教育）
6・7	愛媛の文化財活用とボランティア	NPO 法人スタッフ
8・9	地域の歴史	学芸員
10	中間報告	高校教員（家庭科）
11・12	愛媛の源氏物語研究	大学教員（国語教育）
13・14	愛媛の方言	大学教員（国語教育）
15～18	小学1年生に「えひめ」を教えよう 伊予弁「ももたらう」の読み聞かせ	大学教員（教育学）
19・20	愛媛の食	大学教員（家庭科教育）
21・22	最終報告会	関係者全員
23	総括	高校教員（家庭科）・大学教員（国語教育）

この授業の特徴として、まず挙げられるのは、1年間という比較的長期間にわたって授業を行った点である。一般に、高大連携といえば、高校生が「体験入学」のような形式で大学を訪れるにせよ、大学教員が大学で高校生対象の講座を開いたり高校に出張して授業をしたりするにせよ、単発的なものが多い。その場合、大学の学部・学科の説明や進路ガイダンスとしては有意義な情報を提供することができるが、学習した内容に関する興味・関心や理解を深めたり、それをさらなる発展的な学習に繋げたりすることは難しくなる。そこで、長期的な授業計画を立てることによって、高校生の学習をより豊かで発展的なものにしたいと考えた。

2つめの特徴として、表1の担当責任者の欄にあるように、地域の社会教育機関の学芸員やNPO 法人のスタッフが参加した点を挙げることができる。「地域の暮らし」を主題とする場合、高校・大学の教員だけでは十分にカバーできない領域がある。そこで、学芸員やNPO 法人のスタッフに協力してもらい、高校生の学びを広げたり深めたりしたいと考えたのである。

3つめに、学習した内容を高校生が能動的・主体的に活かす機会を設定したという点が挙げられる。表1中の第15～18回「小学1年生に『えひめ』を教えよう」がこれに当たる。

このような機会を設定したのは次に述べるような背景がある。実は、「えひめ学」を実施する前年（2002年）にも、附属農校と愛媛大学教育学部では、フリースubジェクトの授業を同じようなオムニバス形式で実施したのだが⁹⁾、当時は、高校生が学習した内容をアウトプットすることの重要性について、それほど明確に認識してはいなかった。そ

の結果、高校生は、愛媛の文化や歴史について学ぶことそのものは楽しんでいただけたようだが、それを自分の生活や生き方と関連させて捉えるまでには至らなかった。そこで今回は、そうした捉え方を高校生に身につけてもらうべく、学習した内容について、ただ理解するだけでなく、自分のことばで他の人に伝えるという体験学習を導入しようと考えたのである。

高校生は、第1回から第14回までの授業で学習した主題のなかから、小学生に伝えたい内容として「愛媛の方言」を選択した。もちろん、彼らは、自分たちが大学教員から受けた授業の内容をそのまま要約して伝えるのではなく、小学1年生が楽しく学べるように、伝える内容や方法に彼らなりの創意工夫を凝らした。その結果、生まれたのが、「伊予弁『ももたろう』の読み聞かせ」という授業である。この授業は、愛媛大学教育学部附属小学校で2003年11月26日に実施された¹⁰⁾。

3. 成 果

さて、フリースブジェクト「えひめ学」の成果として、次の2つを挙げることができる。まず1つは、高校生の学びが従来とは異なる方向へ展開したことである。もう1つは、高校・大学の教員や学芸員にとって相互研修（FD）の機会になったということである。以下で、それぞれについて具体的に見ていくことにしよう。

(1) 高校生の学び1——逐語訳から「生きたことばの伝承」へ

「伊予弁『ももたろう』の読み聞かせ」の準備をするにあたって、高校生は、まず「ももたろう」の紙芝居を地域の公立図書館から借り出し、次に、その紙芝居の裏に書かれている共通日本語のシナリオを、方言の辞書などを用いて伊予弁に逐語訳する、という作業を行った。彼らは、いわば、英語を日本語に翻訳するような形式で、共通日本語を伊予弁に移し替えたのである。高校教員M氏によると、この作業の間、高校生はずっとぼんやりとした違和感をもっていたようだったという。この違和感の内実は、読み聞かせを実施する5日前に判明した。それは、逐語訳した「伊予弁版・ももたろう」のシナリオを声に出して読むことができないというものであった。つまり、伊予弁のアクセントやイントネーションがわからないために、高校生は、書かれてあるシナリオを読み上げることができなかったのである。彼らは慌てて地域の高齢者（第6・7回の授業で出会ったNPO法人のスタッフ）に取材を申し込み、話し言葉としての方言を改めて学び直した。

この学びについて、第13・14回で「愛媛の方言」という授業を担当した大学教員S氏は、次のようにコメントしている。「学校における国語の授業の多くは書いてあることを黙読して理解するというものなんですよ。しかし、言語は本来コミュニケーションのためにあるんです。方言を音にしなけりばならなかったという体験を通して、高校生は言語本来のあり方に触れたんでしょうね。」

また、高校生が方言に興味を覚え、彼らなりの創意工夫を加えて小学生に教えようとした点について、S氏は次のように述べている。「古いことばだから大切にしろ、といってもそれは無理。でも、それでは方言文化はやせ細ってしまう。高校生の『ももたろう』を聞いて、小学生がおじいちゃん・おばあちゃんと話してみようと感じたら、その方がことばや方言を大切にしたいと思うようになります。」この点について、学芸員D氏も、「この授業を通して、知の世代継承ができたのではないか」と指摘している。

(2) 高校生の学び2——自分を見つめ直す学びへ

ところで、小学生に教えるという体験はまた、高校生にとって自分の生き方を具体的に見つめ直す機会にもなった。たとえば、高校生C氏は次のように述べている。「授業の後に、子どもと関わる仕事がしたいな、と思うようになった。でも、教師として教えるのは私には無理。『ももたろう』の授業で、それがわかった。だから、子どもに共感することのできる、そういう職業に就ければいいなあ。」C氏は、医療事務職員として小児科で勤務する道を模索中である。

また、別の高校生は、「えひめ学」の授業を通して地域の歴史への関心が高まり、「芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛」の活動に参加するようになった。この活動は、大学教員・大学生・地方自治体職員・学芸員・地域の歴史愛好家を中心となって、2001年の芸予地震で被災した文化財、特に古文書や民具に関する調査や保護を進めるボランティアである。さまざまな立場の人々が共同研究を行うという活動、また、そこに高校生が参加しているという事

実は、「特筆すべき学びの形態」（学芸員 D 氏）であるといえよう¹¹⁾。

(3) 大学教員の学び

次に、教員側にとって相互研修の機会になったという点について見ていきたい。

大学教員 S 氏は、高校生に教えるという体験そのものが自分の授業技術や教材のあり方を見直す機会になったと述べている。これに加えて重要なのは、自分の専門領域の社会的な意味や位置づけを再認識する契機が与えられたことだという。日本語学を専門とする S 氏は、共通日本語を教えることだけが国語という教科の目的ではなく、方言（話されることば）も大切だという立場で教育・研究を進めている。S 氏は、『ことば』を守るのは難しいけれど、『コミュニケーション』を守ろうと思うと必然的に方言や昔のことばを知ろう、大切にしようとするようになることに改めて気づいた」と述べ、大学生にも高校生が小学生に対して行ったような授業をしてもらい、その大学生を「世代と世代を仲立ちして、人と繋がるために方言やことばを大切にしようと思ってくれるような次世代のリーダーとして輩出」することが、大学教員としての自分の役割だということを再確認した、と語っている。

(4) 学芸員の学び

博物館の学芸員 D 氏にとって、高校で授業を担当することは、研究成果を地域に還元するという普及啓発活動の一環であった。ただし、実際に教えてみて、従来、博物館が進めてきた普及啓発活動が、たいていの場合、小学生を中心とする子どもか高齢者を対象としており、一方で、高校生や大学生がエアポケットのように手薄になっていたことに気づいたという。D 氏は、今回の授業を通して、「自分の仕事が中高生にも通じるんだ、必要なんだということが実感できた」とも語っている。

(5) 高校教員の学び

最後に、高校教員 M 氏は、高校生が小学生に教えるという場面に立ち会って、「生徒たちの、普段の生活からは見えない面が、小学生とのかかわりのなかで見えてきた」と述べている。また、このことをきっかけに「教育とは何か」を改めて考えさせられたという。「教室で座って授業をするだけが『教育』ではないんだな、と。人って人と人の関係のなかで育っていくものなんだということを突きつけられたように思いました。そういう場を提供することも大事な教育なんだ、って。」

さらに M 氏は、今回、附属農高と小学校、大学、社会教育機関とが連携・協力して授業を実施したことによって、それぞれの学校・機関の間で互いに対する理解が少し深まったのではないかと語る。「私自身、大学の先生って実はこんな面白いことをしてるんだとか、いまの小学生ってこんな感じなんだとか知ることができて、新鮮な体験でした。」このような相互理解こそが、今後、生涯学習社会に向けて、初等、中等、高等教育や地域の社会教育機関の間で有機的、実質的な連携・接続を推進する基盤となるのではないだろうか。

おわりに

2003年度に附属農高で実施されたフリーサブジェクト「えひめ学」は、次の3つの点に特徴があった。第1に、1年間という比較的長期にわたって授業を実施した点。第2に、高校・大学・地域の社会教育機関などが、授業における教育内容を豊かにしようという目的で有機的、実質的に連携した点。そして第3に、授業で学習した内容を高校生が能動的・主体的に活用する機会を設定した点である。

このような特徴をもった授業を実施したことによって、高校生は、通常の授業ではあまりできないような学びの体験、すなわち「生きたことば」を学ぶとともに、その学びの過程そのものがことばの世代継承の過程にかかわっている、という体験をすることができた。また、「えひめ学」の授業をきっかけに、自分の生き方を具体的に見直したり、文化財保護のボランティアに参加したりする高校生もいた。このように、「えひめ学」の授業は、高校生を知的に動機づけたり彼らの学習意欲や進路意識を高めたりするのに貢献したということができる。

他にも、「えひめ学」の授業を介して、さまざまな立場の人々の間で新たな繋がりが、そして、さまざまな学校や教育機関の間で相互理解が生まれた。さらに、今回授業を担当した人文科学系の大学教員や学芸員に特にいえることで

あるが、人と人、世代と世代が繋がり共生・共存していくための知を再生・創造・伝承するという点に、自分の専門領域の社会的な意味や位置づけを改めて見出すことができた。これらも、「えひめ学」の成果であるといえよう¹²⁾。

今後の課題としては、大学の附属学校で行われた今回の試みを、エッセンスを喪失することなく、地域の公立学校に普及させていくことが挙げられるだろう。

謝辞：「えひめ学」に参加した高校生、小学生、地域の人々、学校・大学関係者、そしてインタビューに協力して下さった方々に深甚なる感謝の意を捧げます。

註

- 1) 大学教育学会編（2004）『大学教育学会誌』第26巻・第2号の1-58頁に、この大会における総合テーマに関する講演やシンポジウムの報告が掲載されている。
- 2) 杉谷祐美子（2004）「大学教育の接続—その現状と課題—」、『大学教育学会誌』第26巻・第2号、16-22頁を参照。
- 3) 筆者の前任校は愛媛大学教育学部であり、在職中にフリーサブプロジェクト「えひめ学」の授業に参加した。
- 4) 「えひめ学」のなかで行われた各回の授業の概要については、福田安典・皆川勝子ほか（2004）「高大および地域連携による『総合的な学習の時間』」、『平成15年度 文部科学省研究開発学校 研究開発実施報告書（第3年次）（研究開発課題）〔高・大連携〕生涯学習社会を見通した高校・大学の連携、接続の在り方の研究開発』（愛媛大学農学部附属農業高等学校）、147-174頁を参照（以下、『附属農校報告書』という）。
- 5) インタビューは次の5名に協力していただいた。インタビュアーは筆者が務めた。括弧内は、インタビューを実施した日時である。
大学教員 S 氏・愛媛大学教育学部・国語教育（2004年4月15日 13：00～14：00）。学芸員 D 氏・愛媛県歴史文化博物館（2004年5月13日 11：00～11：30）。高校生 2 名、C 氏と N 氏・附属農高 2 年生（2004年5月14日 15：40～16：20）。高校教員 M 氏・附属農高・家庭科（2004年5月14日 16：30～17：30）
- 6) 第Ⅱ部・第1章「高校教育の改革」より。
- 7) 第4章「初等中等教育と高等教育との接続の改善のための連携の在り方」より。
- 8) この授業研究開発は、附属農校が文部科学省から指定を受けて進めていた「生涯学習社会を見通した高校・大学の連携・接続の在り方の研究開発」（平成13～15年度）の一環である。『附属農校報告書』を参照。
- 9) 2002年度に実施したフリーサブプロジェクト「私たちの暮らしのルーツ—今治・松山・宇和島周辺—」の授業実践については、次の文献を参照。皆川勝子・福田安典ほか（2003）「高大及び地域連携による『フリーサブプロジェクト』の概要」・「高大及び地域連携による『フリーサブプロジェクト』」、『研究紀要 第25集』（愛媛大学農学部附属農業高等学校）、97-101頁・109-178頁。
- 10) 授業概要は、『附属農校報告書』、163-168頁を参照。
- 11) 「芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛」への高校生の参加は、愛媛新聞2003年12月24日18面に掲載されている。
- 12) 本文では取り上げなかったが、たとえば Teaching Assistant として協力してくれた大学院生・大学生が、普段は直接接することのない高校生の様子を知ることができたり、諦めかけていた教員への道を再度歩む決意を固めたりするなど、この授業は、他の関係者にとっても、自分の生き方を見つめたり、授業技術を向上させたりという機会になっていた。